人間発達科学部紀要　第１巻第１号：111－119（２００６）

子どもの認知する親の養育態度と学校適応との関連についての検討

姜　信善・酒井　えりか*

Relationship between the Children's Perception of Parents' Attitude for Child Rearing and School Adaptation

Sinsun KANG, Erika SAKAI

キーワード：子どもの認知する親の養育態度、バウムリンド、受容、統制、学校適応
Keywords：The children's perception of parents attitude for child rearing, Baumrind, D, acceptation, control, school adaptation

問　題

近年、学校においては、学級崩壊・不登校・いじめなど、様々な不適応行動が見られる。「児童期は、学校生活や友達集団の中で子どもの世界が飛躍的に広がり、社会的な発達が著しい時期である（菅原・八木下・詫摩・小泉・瀬地山・菅原・北村, 2002）」と述べられているように、児童期は乳幼児期よりも生活環境が広がり、親以外の人物から影響を受けることも多いであろう。しかし、まだ全体的に親に依存している段階であり、親が子どもに及ぼす影響は大きいと考えられる。そこで、養育態度と学校適応との関連について検討した研究では、母親の積極的拒否型の養育態度の影響が家庭や学校内での社会的スキルを媒介にして、子どものクラス内地位に及ぶことが示された（戸ヶ崎・坂野, 1997）。また、酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村（2002）は、親子相互の信頼感は子どもの学校適応と強く関連しており、相互の信頼感が希薄な家庭の子どもは不適応な傾向にあることを明らかにし、健全な学校生活を送るためには、親や親友などの重要な他者との間に基本的信頼感を形成することが必要であると述べている。さらに、大重（2004）は、関係性攻撃と親への親和性との関連を検討し、親への親和性が高い子どもは能動的に関係性攻撃を示すことや関係性攻撃の対象になることが少ないことを明らかにした。また、関係性攻撃経験後においても親への親和性のなかで高い「親への親密さ」は他者不信になりにくく、「親への同一視欲求」の高さは仲間関係をより重視することにつながることが示された。このように、親への親和性が高いことにより、他者を攻撃したり、自らがターゲットとされたりすることが少なくなり、関係性攻撃経験後も他者不信になりにくく、望ましい仲間関係を持とうとすることが示された。このように、先行研究においては、親の養育態度と学校適応との関連の検討といっても、仲間場面に焦点をあて、検討したものが多い。学校適応を学校での仲間場面に限らず、様々な側面からとらえ、親の養育態度との関連を検討していくことが必要であると考えられる。

さて、養育態度についての研究では、子どもの認知する親の養育態度に着目し、子どもの学校適応に及ぼす影響を検討したものはあまり見当たらない。松田・鈴木（1988）は、家族環境についての親の認知は子どもの効力感とほとんど相関関係が見られないが、子ども自身の認知した家族環境は効力感と密接に関連することを明らかにし、子どもの認知した母親の受容的・子ども中心的な養育態度は子どもの効力感と正の相関関係にあることを報告している。西出・夏野（1997）においては、子どもの認知する家族システムの機能状態は抑うつ感を抑える一方、母親のひとりよがり的な認知は、子どもの抑うつ感を増加させることが示されている。金子・新瀬（2002）は、親の認知する養育態度と子どもの向社会性との間には有意な関連は見られないが、子どもの認知する父親・母親両者の養育態度が、子どもの意見を受け止め、子どもの気持ちに寄り添う「関心・受容的態度」や、躾について厳しく諭し誘導する「指導的態度」である時、子どもの向社会性を促進することを明らかにした。篠原・福山（1987）は、親の養育態度の影響を受ける子ども自身が親の養育態度をどのように感じ、どのように対処するかに意味があるため、子ども自身の認知が重要であると述べている。金子・新瀬（2002）も述べているように、養育態度に関しては、親が何をするかだけでなく、親からされたことを子どもがどのように感じ、次の活

＊富山大学　教育学部　学校教育教員養成課程　学校心理学専攻　平成17年度卒業

動につなげるかが重要だと考えられる。以上のことから、学校適応と親の養育態度との関連を明らかにすることにおいて、養育態度については親の認知より子どもの認知の方がより有効であると推察される。ところで、養育態度の研究では、母親の養育態度を取り上げたものが多く見られるが、篠原・福山(1987)は、父親の養育態度も子どもに影響を及ぼすことを明らかにした。中道・中澤（2003）は、父親・母親が互いに補い合って育児をするため、両親を総合的に捉える必要性を述べている。母親が有職の場合、育児を両親で協力して行うため、応答的態度、統制的態度を両親で分担する可能性を示唆している。近年、夫婦共働きの家庭が増えており、母親だけに育児を任せることはできないだろう。よって、母親だけに限定し、子どもが受けている養育態度をとらえることは難しいと考えられる。父親・母親を限定せず、“親”という総合した表現を用いることで、子どもが受けている養育態度の全体像をとらえることができるのではないだろうか。

そこで、本研究の具体的目的は、受容・関与、厳格・監督の2次元を用い、「指導的な親」を理想的養育態度としたBaumrind, D（1967）の分類方法を基に、子どもの認知する親の養育態度に関する尺度を作成し、以下の内容を検討することである。

1．子どもの認知する親の養育態度が学校適応に及ぼす影響の検討
2．子どもの認知する親の養育態度と学校適応との関連の検討

方　法

予備調査

予備調査では、養育経験のある親を対象に養育態度全般に関する内容を、教諭を対象に学校適応・不適応に関する内容を収集する。

1．調査対象者

（1）親の養育態度について

Ⅰ県・Ｔ県の小学生以上の子どもを持つ親68名（父親22名、母親46名）

（2）子どもの学校適応について

Ⅰ県・Ｔ県の教諭23名（男５名、女18名）

2．調査時期

2005年８月～９月

3．調査内容

（1）親の養育態度について

親が実際に行った子どもの養育についての全般的な内容に関するものである。全ての質問項目については自由記述により回答が求められた。質問項目の具体的内容は、①基本的生活習慣に関する躾や子どもに与えた家庭内の役割について、②子どもが友達と仲良くするための親の関わり方や自主性を伸ばすための親の関わり方について、③子どもが良いことをした時・失敗した時の親の接し方について、④子育ての成功・失敗の両方の体験について、⑤子育てにおいて特に心掛けたことについてである。

（2）子どもの学校適応について

教師から見て適応している、または適応していないと感じる子どもの特徴に関する質問項目が作成された。具体的には、①友人との関わり方について、②授業態度について、③規則・決まりについて、④子どもが精一杯頑張っていると感じる時の特徴について、という内容である。全ての質問項目について自由記述により回答が求められた。

4．調査結果

（1）親の養育態度に関する測定項目の内容収集および作成・検討

収集された回答内容は、基本的生活習慣に関する躾、子どもとの行動や感情の共有、子どもの自律性および自主性の育て方などであった。

予備調査で得られた内容については、被験者である小学生が回答しやすいよう、表現方法を検討し、問題点がある場合は修正・削除を行い、項目作成を行った。子どもが理解できる表現方法であるかの判定および不適切な表現の修正においては、現役の小学校教諭の助言が得られた。最終的に37項目が養育態度測定項目とされた。

（2）学校適応に関する測定項目の内容収集および作成・検討

収集された回答内容は、仲間場面に関するもの、学校内の規則に関するもの、授業中の態度に関するものなどであった。

養育態度測定項目作成においての手続きと同様に、各項目の再検討や修正を行い、最終的に16項目が学校適応測定項目とされた。

本調査

1．調査対象児

Ⅰ県内の公立小学校５，６年生351名（男子170名、女子181名）

2．調査時期

2005年10月下旬～11月中旬

３．調査内容

予備調査によって収集された項目について、「とてもあてはまる」（５点）～「全くあてはまらない」（１点）の５件法で回答が求められた。

結　　果

１．尺度の作成について

（１）子どもの認知する親の養育態度尺度について

予備調査の結果を基に作成した子どもの認知する親の養育態度に関する質問項目の回答についての因子分析を行った。固有値の減退状況などから、２因子を仮定することができた。複数の因子に因子負荷量が高い項目を削除した後、残りの25項目について再度因子分析を行った。バリマックス回転後の因子パターンはTable1に示す。累積寄与率は31.4％であった。

第１因子は“親は悩み事を真剣に聞いてくれる”“親は一緒に喜んだり、悲しんだりしてくれる”など、親が子どもの気持ちや日常の出来事をポジティブに捉えたり受け入れたりする内容の項目が高い負荷量を示したため、「受容」因子と命名された。第２因子は“親から約束を守るように言われる”“親から食べ物の好き嫌いをしないように言われる”など、親が子どもに基本的生活習慣や道徳性を身につけさせる働きかけをする内容の項目が高い負荷量を示したことから、「統制」因子と命名された。

因子仮定後にCronbachのα係数を算出したところ、因子ごとのα係数は、第１因子、第２因子それぞれにおいて順に、0.88、0.75であった。

このように、Baumrind, D（1967）の示した受容・関与、厳格・監督のそれぞれに対応するとみなされる「受容」、「統制」の2因子が抽出された。

Table1　子どもの認知する親の養育態度に関する項目の因子分析結果

No	項目内容	F1	F2	共通性
28	親は悩み事を真剣に聞いてくれる。	.727	.160	.554
34	親は一緒に喜んだり、悲しんだりしてくれる。	.695	.217	.529
20	親は自分に合わせて会話してくれる。	.670	.185	.510
30	親は自分のことに一生懸命になってくれる。	.686	.217	.517
24	失敗した時、親は「次がんばろう」と励ましてくれる。	.684	.176	.499
12	親は毎日興味や関心を持って今日の自分の出来事を聞いてくれる。	.633	.104	.411
18	必要な時は親はできる限り一緒にやってくれる（一緒にいてくれる）。	.626	.153	.415
7	ちゃんとできた時やがんばった時に親はほめてくれる。	.622	.200	.426
4	親は聞いたことに対してきちんと答えてくれる。	.611	.199	.412
26	親は色々な所につれて行ってくれる。	.530	.188	.316
14	友達を家に連れて行くと親は喜んで迎えてくれる。	.492	.190	.279
37	悲しんでいる時、親は自分をだきしめてくれる。	.472	.046	.225
8	親は自分がやりたい習い事を選ばせてくれる。	.393	.158	.180
10	親はたくさん本を読んでくれる。	.362	.141	.151
2	一人で食事をすることがある。	.215	.011	.047
17	親から約束を守るように教えられる。	.299	.614	.466
21	親から嘘をつかないように教えられる。	.144	.562	.337
5	親から食べ物の好き嫌いをしないように言われる。	.117	.552	.318
16	親から自分の事は自分で考えてやるように言われる。	.112	.518	.281
25	親からありがとうやごめんなさいを言うように言われる。	.280	.514	.343
15	悪いことをしたら親から怒られる。	.009	.478	.228
33	親から学校に遅刻しないように言われる。	.289	.470	.304
9	親から平日、休日関係なく早寝早起きするように言われる。	.176	.393	.186
1	親から３食きちんと食べるように言われる。	.159	.387	.175
31	親の前でだだをこねても自分の意見は通らない。	-.037	.260	.069
	因子負荷固有値	6.917	1.573	
	因子寄与率（累積寄与率）	25.6	5.8	(31.4)
	α係数	0.88	0.75	

（２）学校適応尺度について

予備調査の結果を基に作成した子どもの学校適応に関する質問項目の回答についての因子分析を行った。固有値の減退状況などから、４因子を仮定することができた。複数の因子に因子負荷量が高い項目を削除した後、残りの14項目について再度因子分析を行った。バリマックス回転後の因子パターンはTable2に示す。累積寄与率は41.8％であった。

第１因子は“難しい事もやり通す自信がある”“先生から出された課題に楽しく取り組めている”“人前でも積極的に自分の意見が言える”などの項目から成り、「授業場面での適応」因子と命名された。第２因子は“みんなが使う物を大切に扱う”“みんなで決めたルールや規則をきちんと守る”などの項目から成り、「規則・ルールへの適応」因子と命名された。第３因子は“自分から誰にでも声をかける”“大勢の友達と遊ぶのが好きだ”という項目から成り、「仲間場面での適応」因子と命名された。第４因子は“自分は何でもうまくできる”“将来りっぱな人になれると思う”という項目から成り、「肯定的自己像」因子と命名された。

因子仮定後にCronbachのα係数を算出したところ、因子ごとのα係数は、第１因子、第２因子、第３因子、第４因子それぞれにおいて順に、0.77、0.68、0.54、0.62であった。

２．子どもの認知する親の養育態度が学校適応に及ぼす影響について

子どもの認知する親の養育態度と学校適応との関連を検討するため、子どもの認知する親の養育態度尺度の下位尺度項目得点と学校適応尺度の下位尺度項目得点との相関関係を求めた。分析結果はTable3に示す。

Table2　学校適応に関する項目の因子分析結果

No	項目内容	F１	F２	F３	F４	共通性
8	難しい事もやり通す自信がある。	.569	.173	.201	.387	.544
14	失敗しても何度でも挑戦する。	.552	.164	.192	.330	.477
6	先生から出された課題に楽しく取り組めている。	.534	.278	.209	.073	.412
2	時間がかかっても最後までやりとげる。	.525	.318	.111	.221	.410
16	人前でも積極的に自分の意見が言える。	.421	.020	.269	.225	300
15	みんなが使う物を大切に扱う。	.124	.704	.047	.120	.527
13	みんなで決めたルールや学校の規則をきちんと守る。	.157	.622	.013	.131	.429
5	集団を乱す行動はしないようにする。	.293	.493	.155	-.018	.353
11	掃除をしっかりする。	.265	.479	.079	.103	.316
7	友達の悪口を言わない。	-.025	.367	-.008	.027	.136
3	自分から誰にでも声をかける。	.161	.078	.889	.182	.855
9	大勢の友達と遊ぶのが好きだ。	.216	.010	.330	.129	.172
4	自分は何でもうまくできる。	.202	.125	.215	.733	.640
10	将来りっぱな人になれると思う。	.313	.142	.169	.471	.368
	因子負荷固有値	4.556	1.196	.550	.383	
	因子寄与率（累積寄与率）	28.5	7.5	3.4	2.4	(41.8)
	α係数	0.77	0.68	0.54	0.62	

Table3　学校適応尺度各因子項目合計得点と子どもの認知する親の養育態度尺度各因子項目合計得点との相関関係

	受容	統制	学校が楽しい。
授業場面での適応	.312**	.355**	.509**
規則・ルールへの適応	.281**	.201**	.212**
仲間場面での適応	.199**	.256**	.457**
肯定的自己像	.219**	.202**	.267**
学校が楽しい。	.326**	.324**	1.000

**p<.01

学校適応の全ての各尺度因子項目合計得点と子どもの認知する親の養育態度尺度の全ての各尺度因子項目合計得点との間に有意な相関関係が見られた（p<.01）。また、「学校が楽しい」という項目は学校適応および子どもの認知する親の養育態度尺度の全ての各尺度因子項目合計得点との間に有意な相関関係が見られた（p<.01）。

そこで、子どもの認知する親の養育態度が学校適応に及ぼす影響をより具体的に検討するため、学校適応の各因子項目合計得点を基準変数とし、子どもの認知する親の養育態度の各因子項目合計得点を説明変数とする重回帰分析が行われた。分析結果はFigure1に示す。

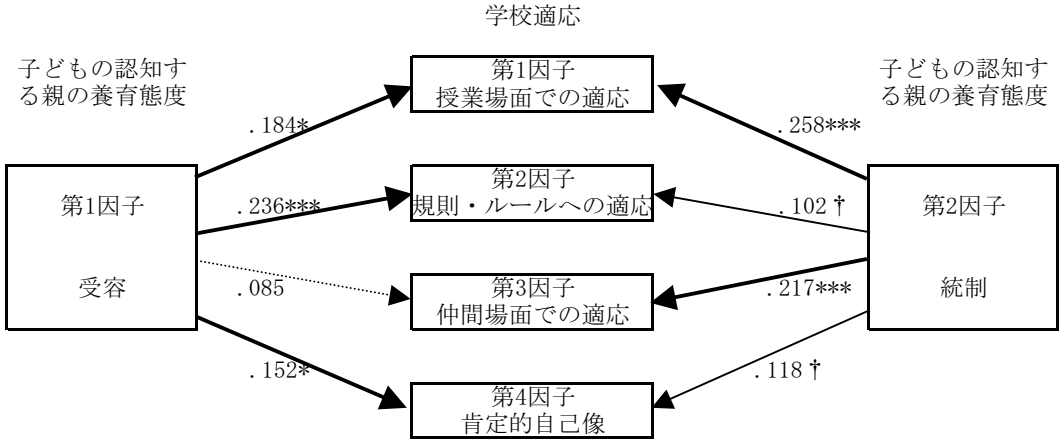

Figure1 「子どもの認知する親の養育態度→学校適応」の重回帰分析の結果
（各数字はβ係数を表す）
***p<.001, **p<.01, *p<.05, †p<.10

学校適応第１因子「授業場面での適応」において子どもの認知する養育態度第1因子「受容」の偏回帰係数は、（β）＝.18（t（313）＝3.13, p<.01, 両側検定）であった。子どもの認知する親の養育態度第2因子「統制」の偏回帰係数は、（β）＝.26（t（313）＝4.38, p<.001, 両側検定）であった。したがって、学校適応第１因子「授業場面での適応」に及ぼす影響は、子どもの認知する親の養育態度の第１因子、第２因子のいずれにおいても有意であった。なお、この時の回帰式全体の説明率は、R^2＝.14であり有意であった（F（2, 313）＝26.40, p<.001）。学校適応第２因子「規則・ルールへの適応」において子どもの認知する親の養育態度第１因子「受容」の偏回帰係数は、（β）＝.24（t（312）＝3.88, p<.001, 両側検定）であった。子どもの認知する親の養育態度第2因子「統制」の偏回帰係数は、（β）＝.10（t（312）＝1.68, p<.10, 両側検定）であった。したがって、学校適応第2因子「規則・ルールへの適応」に及ぼす影響は、子どもの認知する親の養育態度の第１因子においては有意であり、第２因子においては有意傾向であった。なお、この時の回帰式全体の説明率はR^2＝.09であり有意であった（F（2, 312）＝15.16, p<.001）。学校適応第３因子「仲間場面での適応」において子どもの認知する親の養育態度第１因子「受容」の偏回帰係数は、（β）＝.08（t（315）＝1.39, n.s, 両側検定）であった。子どもの認知する親の養育態度第２因子「統制」の偏回帰係数は、（β）＝.22（t（315）＝3.55, p<.001, 両側検定）であった。したがって、学校適応第3因子「仲間場面での適応」に及ぼす影響は、子どもの認知する親の養育態度の第2因子においてのみ有意であった。なお、この時の回帰式全体の説明率はR^2＝.07であり有意であった（F（2, 315）＝12.10, p<.001）。学校適応第４因子「肯定的自己像」において子どもの認知する親の養育態度第1因子「受容」の偏回帰係数は、（β）＝.15（t（315）＝2.46, p<.05, 両側検定）であった。子どもの認知する親の養育態度第２因子「統制」の偏回帰係数は、（β）＝.12（t（315）＝1.90, p<.10, 両側検定）であった。したがって、学校適応第4因子「肯定的自己像」に及ぼす影響は、子どもの認知する親の養育態度の第1因子においては有意であり、第2因子においては有意傾向であった。なお、この時の回帰式全体の説明率はR^2＝.05であり有意であった（F（2, 315）＝8.93, p<.001）。

３．子どもの認知する親の養育態度と学校適応との関連について

Baumrind, D（1967）は、受容・関与、厳格・監督の２次元を用い、指導的な（authoritative）親、無関心な（neglectful）親、権威的な（authoritarian）親、寛大な（indulgent）親、という４つの養育態度に分類した。そこで、子どもの認知する親の養育態度と学校適応との関連をより具体的に調べるために、Baumrind, D（1967）の養育態度の分類基準を基に子どもの認知する親の養育態度の群分けを行い検討した。すなわち、本研究で作成された子どもの

認知する親の養育態度尺度の「受容」、「統制」それぞれの項目得点の平均が求められ、その平均得点＋1SDより低い場合は低群、平均得点＋1SD以上の場合は高群に分けられた。さらに、受容・統制いずれも高群は「指導的な親群」、受容高群・統制低群は「寛大な親群」、受容低群・統制高群は「権威的な親群」、受容･統制いずれも低群は「無関心な親群」と、それぞれ命名された。子どもの認知する親の養育態度の群分けについてはFigure2に、分散分析の結果はTable4に示す。このように分類された養育態度群においては性の人数においての偏りが見られたため、養育態度群を独立変数、学校適応尺度各因子項目得点を従属変数とする1要因分散分析を行った。その上で分散分析の結果が有意である場合、下位検定としてLSD法による多重比較を行った。

学校適応第１因子「授業場面での適応」において、子どもの認知する親の養育態度群の主効果が見られ（F（3,307）＝5.93,p<.01)、「寛大な親群」より「権威的な親群」、「指導的な親群」の方が、「無関心な親群」より「権威的な親群」、「指導的な親群」の方がそれぞれ得点が高いことが示された（Mse＝13.34,p<.05)。学校適応第2因子「規則・ルールへ

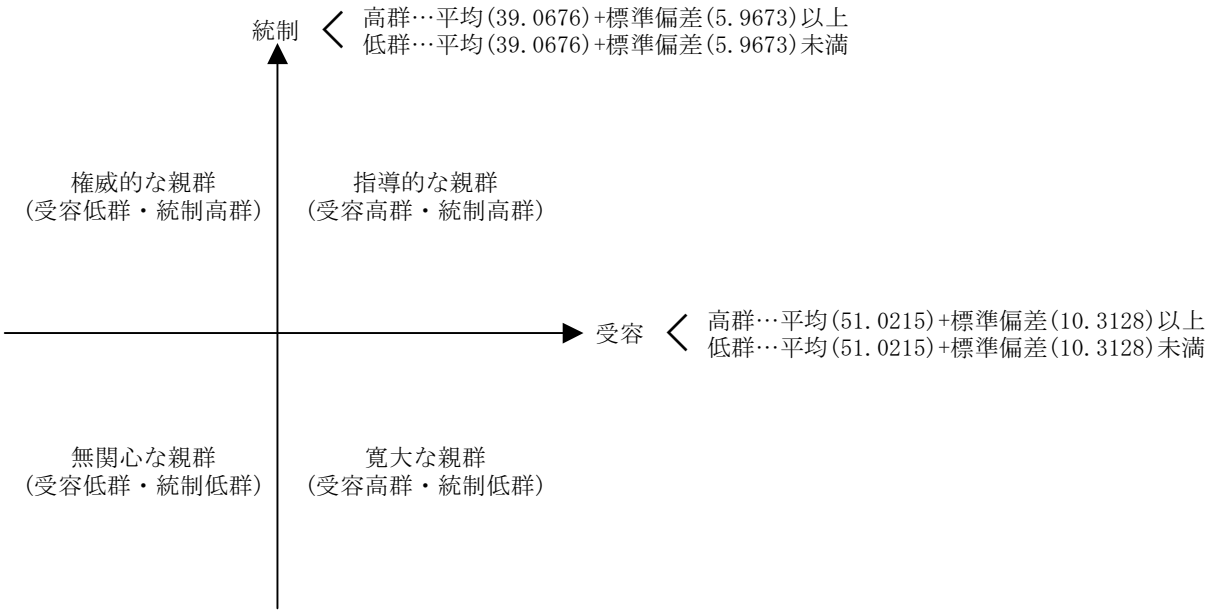

Figure2　受容と統制の組み合わせによる子どもの認知する親の養育態度の群分け

Table4　子どもの認知する親の養育態度群による学校適応尺度各因子項目合計得点の平均とSDおよび分散分析の結果

		M（SD）	N	主効果	下位検定
授業場面での適応	指導的な親群	18.42(5.34)	19	F(3,307)=5.93**	寛大な親群＜権威的な親群、指導的な親群
	寛大な親群	15.50(3.04)	28		無関心な親群＜権威的な親群、指導的な親群
	権威的な親群	17.92(3.96)	25		
	無関心な親群	15.62(3.51)	244		
規則・ルールへの適応	指導的な親群	18.47(4.48)	19	F(3,307)=2.68*	無関心な親群＜指導的な親群
	寛大な親群	17.14(3.23)	28		
	権威的な親群	17.36(3.63)	25		
	無関心な親群	16.49(3.10)	243		
仲間場面での適応	指導的な親群	7.58(2.29)	19	F(3,307)=2.68*	無関心な親群＜権威的な親群
	寛大な親群	7.54(1.64)	28		
	権威的な親群	8.24(1.54)	25		
	無関心な親群	7.22(1.84)	246		
肯定的自己像	指導的な親群	6.37(2.09)	19	F(3,307)=5.16**	寛大な親群＜権威的な親群、指導的な親群
	寛大な親群	4.93(1.36)	29		無関心な親群＜権威的な親群、指導的な親群
	権威的な親群	5.80(1.66)	25		
	無関心な親群	5.17(1.46)	245		

***p<.001，**p<.01，*p<.05，†p<.10

の適応」において、子どもの認知する親の養育態度群の主効果が見られ（F（3,307）＝2.68,p<.05）、「無関心な親群」より「指導的な親群」の方が得点が高いことが示された（Mse＝10.67,p<.05）。学校適応第３因子「仲間場面での適応」において、子どもの認知する親の養育態度群の主効果が見られ（F（3,307）＝2.68,p<.05）、「無関心な親群」より「権威的な親群」の方が得点が高いことが示された（Mse＝3.37,p<.05）。学校適応第４因子「肯定的自己像」において、子どもの認知する親の養育態度群の主効果が見られ（F(3,307)＝5.16,p<.01）、「寛大な親群」より「権威的な親群」、「指導的な親群」の方が、「無関心な親群」より「権威的な親群」、「指導的な親群」の方が、それぞれ得点が高いことが示された（Mse＝2.39,p<.05）。

考　　察

１．子どもの認知する親の養育態度が学校適応に及ぼす影響について

子どもの認知する親の養育態度の第１因子「受容」は、学校適応の第１因子「授業場面での適応」、第２因子「規則・ルールへの適応」、第４因子「肯定的自己像」に正の影響を与えることが示された。親から受容されていると感じることは、家庭での様々な活動において、親が応援してくれたり、関心を持って見守ってくれるなど、自分のやりたいことができる環境の中で育っているため、挑戦したことがうまくできた経験を多く積んでいることに起因していると考えられる。そのため、親からの受容が肯定的自己像の形成に影響を及ぼすと考えられる。さらに、自分のやりたいことができる環境の中で育っていることで、物事をやり遂げる経験が豊富であることが考えられ、親からの受容が授業場面での適応に影響を与えるのではないかと推察される。ところで、受容の項目得点が高いということは、実際においても親が子どもを受容していることが予想されるが、本研究では子どもが親からの受容を認知していることが得点に反映されている。そのため、親からの受容が高いと認知していることは、受容された経験を基に何をすれば相手が喜ぶか、どうすれば相手のためになるかなど、他者の立場に立った考え方ができることにつながると考えられる。したがって、親からの受容の経験により、人に迷惑をかけない、相手を傷つけないといった意味を含む規則・ルールへの適応に影響を与えるものと推察される。

子どもの認知する親の養育態度の第２因子「統制」は、学校適応のすべての因子に有意な正の影響を与える、または正の影響を与える傾向があることが示された。親から指導される経験を積んでいることで、小学校という集団生活の場でも自分勝手な行動をしないように、自分の欲求をコントロールできるのではないだろうか。ところで、学校適応第１因子「授業場面での適応」、第３因子「仲間場面での適応」においては子どもの認知する親の養育態度の第２因子「統制」の影響を特に大きく受けることが示されている。親から指導される経験を積んでいる場合は、自分の間違いや失敗に気づくことがよりよくできると考えられる。同じ失敗をしないように気をつけたり、改善点を考えた上でもう一度やり直す経験を多く積んでいることで、失敗しても何度でも挑戦したり、最後までやりとげることができるのだろう。そのため、統制が授業場面の適応に影響を及ぼすのだと推察される。また、仲間場面での適応においては統制の影響は見られるが、受容の有意な影響が見られないことから、子どもがより良い友人関係を築くためには、約束を守る、嘘をつかない、など基本的な対人関係についてのルールを身につけられるよう、必要なことを親が子どもに教えることが重要であると推察される。

ところで、「学校が楽しい」という項目は、学校適応および子どもの認知する親の養育態度尺度の全ての因子項目合計得点との間に、有意な相関が見られた。子どもが学校が楽しいと感じることが、学校適応および親の養育態度の認知に関連していることが推察される。

２．子どもの認知する親の養育態度と学校適応との関連について

受容的養育態度と統制的養育態度のバランスを考えた場合、学校適応の第１因子「授業場面での適応」、第２因子「規則・ルールへの適応」、第４因子「肯定的自己像」において「無関心な親群」より「指導的な親群」の方が得点が高いことが示された。学校適応の第１因子「授業場面での適応」、第４因子「肯定的自己像」において「権威的な親群」、「指導的な親群」の間には有意差が見られなかったものの、指導的な親の平均得点が最も高いことから（Table4参照）、「受容」、「統制」のいずれも高い養育態度が最も望まし

いと推察される。「受容」、「統制」のどちらか一方に偏ることなく、教えなくてはならないことはしっかり教え、子どもを温かく見守ったり、共感したりする、「受容」、「統制」のバランスのとれた態度が学校適応につながるといえるだろう。

ところで、学校適応第３因子「仲間場面での適応」において「無関心な親群」より「権威的な親群」の方が得点が高いことが示された。仲間場面での適応においては、「受容」より「統制」の方がより強く関連していることが推察される。

さて、本研究では、全体の７割以上（318名中246名,77.4％）が「無関心な親群」に分類された。本研究では子どもの認知する親の養育態度による検討を行っているため、親が受容的態度および統制的態度で子育てをしていても子どもに認知されず、無関心な親に分類されたケースもあると考えられる。しかし、学校適応全ての因子において「無関心な親群」の得点が有意に低いことから（Table4参照）、実際の親の養育態度に関わらず、子どもが「受容」、「統制」いずれも低い親であると認知することが学校不適応の要因であると推察される。無関心な親が減ることや無関心な親であると認知する子どもが減ることが、学校不適応の子どもの減少につながるのではないだろうか。

今後の課題

本研究で作成された子どもの認知する親の養育態度尺度は、「受容」、「統制」の２次元で構成され、「受容」、「統制」のいずれも高い指導的な養育態度が、学校適応に関連することが示された。この結果により、Baumrind, D（1967）の養育態度の分類が日本の子どもの認知する親の養育態度においても、適用できると言えるだろう。ただし、本研究で作成された尺度については、信頼性の検討のみ行われ、妥当性の検討は行われていない。今後は特に項目数が少なかった学校適応第３因子「仲間場面での適応」、第４因子「肯定的自己像」の項目の補強とともに、学校適応尺度の妥当性の検討を行うことや、他の養育態度尺度との関連を調べ、子どもの認知する親の養育態度尺度の妥当性を検討することが必要である。その上で、子どもの認知する親の養育態度と学校適応との関連のみならず、子どもの発達全般へ及ぼす影響を明らかにすることが望まれる。

参考文献

Baumrind, D　1967　Child care practices anteceding three patterns of preschool behavior. *Genetic Psychology Monographs*, **75**, 43-88.

金子劭榮・新瀬和夫　2002　小学生の向社会性と親の養育態度　金沢大学教育学部紀要（教育科学編）　第51巻　145-158

松田惺・鈴木眞雄　1988　家族環境及び親の養育態度と児童の効力感　愛知教育大学研究報告（教育科学編）　第37巻　87-100

中道圭人・中澤潤　2003　父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連　千葉大学教育学部研究紀要　第51巻　173-179

西出隆紀・夏野良司　1997　家族システムの機能状態の認知は子どもの抑鬱感にどのような影響を与えるのか　教育心理学研究　第45巻　第４号　456-463

大重絵美里　2004　小学生における関係性攻撃経験が対人関係に及ぼす影響の検討　富山大学教育学部学校教育教員養成課程学校心理学専攻卒業論文

酒井厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則　2002　中学生の親および親友との信頼関係と学校適応　教育心理学研究　第50巻　第１号　12-22

篠原弘章・福山久子　1987　両親の養育態度が児童の達成動機と学習意欲および学校不安に及ぼす影響について　熊本大学教育学部紀要、人文科学　第36号　257-273

菅原ますみ・八木下暁子・詫摩紀子・小泉智恵・瀬地山葉矢・菅原健介・北村俊則　2002　夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連―家族機能および両親の養育態度を媒介として―　教育心理学研究　第50巻　第２号　129-140

杉原一昭　2001　（新井邦二郎・桜井茂男・大川一郎編）発達臨床心理学の最前線　教育出版株式会社

戸ヶ崎泰子・坂野雄二　1997　母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応に及ぼす影響―積極拒否型の養育態度の観点から―　教育心理学研究　第45巻　第２号　173-182

謝　　辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただきました先生方および生徒の皆様に厚く御礼申し上げます。ま

た、質問紙の作成にあたり、ご回答いただきました
方々に心から感謝いたします。

（2006年５月19日受付）
（2006年６月28日受理）